

(言語聴覚学科) 入学試験問題

小論文(課題文)

(注 意)

- 一 係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないこと。
- 二 問題は二頁〜四頁に印刷されている。
- 三 解答用紙に氏名及び受験番号を記入のうえ、解答を所定欄に記載すること。
- 四 机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計(計算機能のついていないものに限る)、受験票以外は置かないこと。
- 五 受験票は番号札の手前に置くこと。
- 六 マスクを着用している者は、試験官が本人確認する間、マスクを外しておくこと。
- 七 ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従うこと。
- 八 試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなったりした者は静かに挙手をして、係員の指示に従うこと。
- 九 試験問題に関する質問は一切受け付けない。
- 十 試験時間中の退出は認めない。
- 十一 試験終了後、試験問題は持ち帰ってよい。

二〇〇五年あたりから短大・大学進学率は五〇%を超えた。今後は、この水準で推移するものと予想できる。すなわち、大幅な上昇も下降もしないだろうということである。なぜこのように、一定水準で推移すると予想するのか、いくつかの理由を述べておこう。

第一に、国民の多くが大学教育のメリットに疑問を感じ始めている。かつてのように大学生の数が少なく、大卒がエリートとして処遇されていた時代には、それを目指して多くの若者が大学に進学しようとした。そのことで、確かに大学進学率は、七〇年代に入って急速に上昇した。しかし、同年齢層の半分が大卒の時代となると、卒業後にエリート層として処遇されることは期待できなくなる。そうなれば、何としても大学進学を目指す者の数は伸びていかない。こうして、大学進学者数が頭打ちとなることがまず考えられる。

第二に、大不況の影響を受けて、現在、大卒の就職も厳しい状況が続いている。大学を卒業しても職がみつからないのなら、大学で学問を学ぶよりも、例えば専門学校などに進学して、技術・技能を修得するほうが合理的ではないか、と思う若者が増加する可能性はある。

しかし、同時に高卒の就職事情も悪く、これらの学生がモラトリアム(就職決定の引き延ばし)を実効して、一時的に短大や大学に進学する場合もありえる。これは進学率を上昇させる要因として作用する。ちなみに二〇一〇年春に卒業した高校生の就職内定率は前年よりも一・七ポイント下回る九三・九%と低く、就職未定者の一部が大学に進学したことも考えられる。

この二つの要因が相殺されて、大学進学率は増減しないものと予想できる。

第三に、大学の経営問題を無視できない。少子化現象によって十八歳人口の減少が行っており、数年後には大学全入時代を迎えようとしている。受験者・入学者の減少により、大学によつては、経営困難となつて倒産するところもあるだろうし、あるいは大学の吸収・合併が促進されることにもなるだろう。子どもの数が減り、大学の数も減ることで、大学生の数も減る。こうして進学率の微小な減少をもたらすことになるだろう。

第四に、十八歳人口の半数以上が大学進学するという状態は、高等教育を受けることのできる能力の分布からしても、もはや限界に達しているといえるのではないか。偏差値の非常に低い大学では、能力においても、意欲においても、大学教育についていけない学生がいることは一般的に知られている。これ以上大学生の数を増加させる案は、人的資源の配分としても望ましくない可能性がある。

こうした見方を支持する例として、アメリカのケースを述べておこう。世界でいち早

く高學歷社会を達成した国がアメリカである。しかし、大学進学率が五〇%を超えた段階で上昇率は止まり、その後、急激に伸びる気配はない。アメリカにおいては、能力分布からしても大学教育を受けることのできない層が目立ち始めていると予想できる。

アメリカの統計によると、短大を含めた大学進学率が五〇%を超えたのは、もう四〇年以上前の一九六五年であった。その後、徐々に上昇して一九九〇年に六〇%を超えた。実に二十五年もかかって一〇ポイントの増加である。したがって、大学進学率はある一定水準に達すると、その上昇率を鈍化させると考えることもできる。

同様のことは、日本でも当てはまるのではないか。すなわち、どの国においても人の能力分布からして、高等教育を受けることのできる人の割合には限界があるのでないだろうか。

ただし、この予想を覆すことが発生するかもしれない。そのことを述べてみよう。

第一に、一部の専門学校を大学と改称することを認めるなど、大学改革の可能性についてである。大学進学率が上昇しなくなると言うことは、必ずしも大学に進学しない十八歳の若者全員が働き始めることを意味しない。専門学校などのように、技能を教える学校に進学する者も少なくない。当然のことながら、これらの人は大学進学者に算入されていないので、たとえ専門学校に進学する人の数が増加しても、現状の制度化においては、大学進学率はほぼ一定の割合で推移することになる。

しかし、最近では新しい動きもある。これらの専門学校のような職業学校のプレステージを上げて、生徒が誇りをもつて教育を受けることができるようになる方策の検討が、文部科学省などの教育界で進行している。わかりやすくいえば、専門学校における職業教育を一層充実させ、名称も大学という名を使ってよいという案である。これまでの大学は学問・研究が中心であったが、職業教育を重視することを容認して、それらを一ひとまとめにして大学教育の一環にするのである。

私が参加していた文部科学省中央教育審議会のキャリア教育・職業教育特別部会では、これらの案も審議されていた。いまずぐに導入されるという案ではないが、大学の定義、あるいは大学の範疇を拡大する政策といつてよい。もしこれらの案が実行されることになれば、これまでの大学と異なる姿となり、大学進学率も上昇に向かうかもしれない。

第二に、国民あるいは教育界の合意によって、大学教育の質の低下を容認する考え方が一般的になれば、従来ならば大学教育についていけない学生が大学に進学することを、いま以上に容認する時代となる可能性はある。大学大衆化路線をますます拡張する流れといつてよい。

(橘木俊詔「日本の教育格差」より)

「課題文2」

「いいですよ」という返事があります。

① 上司に「ちょっとこれコピーとってきてくれる？」と言われた新入社員の言う「いいですよ」

② 居酒屋で客が「飲み物のメニュー持ってきてくれますか？」と言ったときの店員の「いいですよ」

③ 万引きでつかまった若者。「常習じゃないみたいだから今日だけは勘弁してやる。もう二度とやるんじゃないよ、いいね」という書店店主の言葉に「いいですよ」

①から③まで、いずれも「いいですよ」と言われた側に立ってそのときの自分の気持ちを想像してみてください。

(梶原しげる著書より抜粋・改変)

【メ モ】

小 論 文

受験番号

氏名

問題 2 「課題文 2」を読み、あなたが「いいですよ」と言われた側だとしたらどのようなに思うか、文中の①～③のそれぞれについてよくわかるように述べ、言葉遣いについて考えたことを 600 字以内で書きなさい。

得 点

問題 1	問題 2	総合点